



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

折り合いをつける

子どもの声がうるさいからと、幼稚園や保育所が、地域社会から厄介者扱いされているという。この報道を聞いて、ひよっとすると小学校や中学校もそれなりに厄介者になっているのでは…と申し訳なく思えてくる。その報道によると、それでもなんとかやりくりできるようにということで、幼稚園、保育所に対して、運営にあたっての手引書を作り、配布したとのことだった。

しかし、考えてみてほしい。子どもはただすなおに生きているのである。うれしいときは心の底から喜んで、かなしいときは泣き叫び、腹が立てばわめいて、自分でもわけがわからなくなると暴れまくる。今はもうすべてを了解した物静かな大人らしい大人も、赤ちゃんのころはきっと周囲のやっかいになっていたはずだ。

社会が子どもをそっくりそのまま受け入れて、しくじりながら育ていける余裕を失ってしまうというのは、大人にとっても窮屈な世の中になったと言えないだろうか。何かにつけて効率よく、見栄えよく、人と人が離れ離れになって、互いに深く関わらないように、そしてわずらわしくないようにしていくことが優先されようとしている。

人はかかわりあって生活し、自分と違う相手を受け入れながらお互いの生き方に学んでいくものだ。たとえ同じ考えだという相手がいても、よくよくその思いを問うてみると、ずいぶん自分のそれとは違っていることに気付くことがある。立場が異なり、意見が違うからこそ、話し合い、すりあわせ、折り合いを付けていくことに、ねうちを見いだしていける。本校のある教室では、みんなで一つの取組をするのでも、互いの思いをていねいに聴き合い、声かけ合いながら、なんとかみんなが気持ちよくプレイすることに力を入れているところがある。こうした雰囲気が学校全体にじわりと力強く広がっていくことを願っている。

声の大きい者だけが強いわけでない。今一度、学ぶということ、生きるということのあり方を問い直したい。

校長 大林 道範